

途上国の教育環境について②

1. 異文化交流

2年間で行ったことは、農業指導だけではありません。[日本の文化を伝えること](#)もまた、青年海外協力隊の使命なのです。

現地の子どもたちに簡単な[日本語](#)を教えたり、[折り紙](#)等の簡単な遊びを教えたりすることもありました。

また、日本語を学ぶことのできる高校もあり、そこで活動する隊員が中心となって[文化交流のイベント](#)も行いました。首都から遠く離れた東海岸では、音楽の授業が無い学校で[ソーラン節](#)を教え、子どもたちと一緒にお祭りで踊ることもありました。多様な文化に触れることは、子どもたちにとって海外を知る良いきっかけとなり、大きな学びとなったようでした。

2. 現地の子どもたち

資料の写真からもおわかりいただけると思いますが、とにかく[目がイキイキ](#)としています。澄んでいてきれいで、笑顔がとても素敵なのです。私は農村で活動していたので、貧しい生活をしている子どもと関わるが多かったのですが、子どもたちがいつも笑顔だったことが記憶に残っています。

3. 外から見た日本の子どもたち

マダガスカル教育は、主要都市近郊と農村とで大きく変わってきます。つまり生活環境と貧富の差が顕著に現れるということです。裕福な家庭では、幼い頃から幼稚園に通うことができ、義務教育をしっかりと受けて大学進学も可能です。一方、貧しい農村地方では、まだまだ[識字率が低く](#)、学校に通えない子どもも少なくはありません。

電気・水道・ガスの無い生活、また、子どもは家庭にとって貴重な[労働者](#)なのです。学校に通えたとしても、[片道4時間歩いて通う](#)子どももいました。お弁当という文化がなく、お昼は食わずに授業を受けます。また、筆記用具を買うお金も十分ではありません。せつかくノートに勉強しても、トイレットペーパーの代わりにされていました。それでも子どもたちは学校が大好きです。学ぶということに貪欲でした。子どもたちの笑顔がそれを物語っています。

2年間の任務を終え、感じ取ったものは、[教育に貧富の差があってはならない](#)ということでした。

日本の家庭を見ると、きっと筆記用具が買えない子どもはいない（に等しい）と思います。片道4時間歩いて学校に通う子どもがいるのでしょうか。そのような国に生まれたのに、不登校・いじめ・犯罪があるのはなぜでしょうか。——この疑問を抱いたことが、私が第一学院高等学校で働くきっかけとなりました。

約3年の月日が流れましたが、まだ答えは見つからないままです。答えは生徒といっしょに探せるものなのかな、と思っています。まだまだ時間はかかりそうですが、今までの経験を生徒に還元し、何か感じ取ってもらえるような教員になりたいと思っています。

異文化交流



子どもたちの笑顔①



子どもたちの笑顔②

